

令和6・7年度 研究主題

自分の思いを表現する楽しさを味わう幼児を育てる
— かいたりつくったりする中で —

第5回 研究部会 令和8年3月4日（水） 場所 大阪市立桜宮幼稚園

〈討議会〉自園での研究の取組・学んだこと・今後の課題などを、各園で話し合った。

A園

- ・教師が幼児に教材とどう出会えるようにするのか。教師が幼児にどのように声をかけるのか、また、どこまで見守るのかというような、教師の働きかけ方を磨いていく必要があると感じた。
- ・教材研究の大切や教師がかいたり、つくったりすることを楽しいという気持ちをもつことなど、教師の感性を磨くことが、幼児の「やりたい」という気持ちにつながることを学んだ。

B園

- ・区役所主催の絵画展に出展したり、園の近くのスーパーの絵画コンクールに出展したり、近隣の小学校・保育園と一緒に公園に行き秋見つけをした後、小学校でかいたり、つくったりして、遊び交流をした。幼児にとって、かいたり、つくったりすることは生活に密着しているということが分かった。

C園

- ・実践記録を丁寧に検討することで、幼児の心の動きを多面的に読みとる大切さを学んだ。また、夏休みの絵画研修では、いろいろな技法を教えていただき、学んだことを展覧会や保育に生かすことができた。教師も実際に心を動かすことが大事だと思った。



〈実技研修〉・つくり方 ＊かいたり、つくったりしている幼児の様子、活用の仕方など

D園 クリアファイルを使った仕掛け遊び

- ・透明のクリアファイル（透明）にペンで絵をかく。そこに、黒の画用紙を挟むと、絵が見えなくなる・・・ところが、白い画用紙でつくった懐中電灯を挟んで見ると、懐中電灯で照らした部分の絵が浮き出て見える。
- ＊クリアファイルにかく面白さや不思議さを感じられた。一人の幼児がつくって遊んでいると友達が集まって来て、友達同士の関わりが増えた。



E園 ポンドアート（重曹とポンドを使った模様遊び）

- ・ビニール袋にポンドを入れ、底の角を切る。（チューブのポンドでもよい）
 - ・画用紙の上に、そのポンドを絞り出して模様をかく。
 - ・重曹をふりかけた後、余分な重曹を落とす。
 - ・濃いめに溶いた絵の具を、筆でちょんちょんと載せるように色を付ける。
 - ＊重曹を振りかけるとき、幼児はコックさんが調理するようにして楽しんだ。絵の具を載せるときには、色がにじんで広がる様子を楽しんでいた。
- ポンドが固まると立体的に仕上がり、幼児はとても驚いていた。



インパスト（厚塗り）

- ・重曹とポンドとアクリル絵の具を混ぜ、いろいろな色のクリームをつくる。
- ・いろいろな形に切った段ボールに、割り箸を使って垂らしたり、塗ったりする。
- ・2～3日すると固まり、立体的な模様のタイルのようになる。
- ＊作品展で海辺のカフェをイメージしてドングリケーキと一緒に飾った。



F園 ケーキ屋さんごっこ

- ・シリコンボンドと軽量粘土を混ぜてクリームをつくる。
- ・カップに入れたり、磁石に塗ったりして、ビーズなどで飾りを付ける。
- * 幼児は、クリームのむにゅむにゅした感触を楽しみながらつくっていた。年長児も、年少児がつくる様子を、興味をもって見ていたことから、お別れ会のプレゼントにした。



G園 しめ縄づくり

- ・田づくり→田植え→水抜き→稲刈り→稲干し→脱穀→しめ縄づくりと、継続して取り組んだ。
- ・稲を束にしたものを2束づくり、霧吹きで湿らせ木槌で叩いて柔らかくする。2束を編んで、円形にしてから上部を結ぶ。
- ・まつぼっくりや水引きなどを飾る。
- * 幼児が、一人で作るには難しい工程があるため、保護者と一緒につくる機会をもってもよい。幼児たちが、自然物に興味関心をもって取り組むことができた。



視察出張報告

令和7年11月13日(木)・14日(金)に開催された、「第75回造形表現・図画工作・美術教育研究全国大会 大阪大会 全体会 ええ感じ！笑顔輝くおおさかの美術教育～自分らしく学び続ける私たち～」

○1日目 大阪市立幼稚園 公開保育・大阪市立幼稚園教育研究会第2ブロック研究部 実践研究発表 討議会

- ・幼児が「面白い」「やってみたい」と、主体的にかいたり、つくったりする遊びに取り組めるように、材料や用具などの環境が用意されていた。幼児が友達と目的をもってイメージを広げ、楽しんでいた。
- ・討議会では公開保育と実践研究発表について討議した。全国大会で他府県から参加の方が、教師の働きかけや環境構成について、驚きや関心をもっておられた。
- ・幼児が「面白い」「やってみたい」と思うような素材や用具との出会い、教師の受け止めや友達の存在が重要であるということを知ることができた。



指導講評から

教師の働きかけを言語化するとき共感することが多いと思うが、その言葉かけによって、遊びが次の展開に向かったり、幼児同士をつないだりすることも大切である。また、「明日も続きがしたい」と思えるように、片付けるものと残すものを分けることも大切であることを学んだ。

○2日目 全体会 基調提案

- ・教師が学び続ける工夫として、乳幼児・児童・生徒の実態に合わせて取り組めるように教材研究をすることが大切である。子どもの関心がどこにあるかを見極め、子どもたちの思いをしっかりと読みとり、その思いが広がるように、環境や授業を展開することが大切である。
- ・学校種を超えて実践を共有することで、教師自らも学び続けながら児童生徒の表現方法の多様性を広げることができるのではないか。それが大阪の美術教育の発展につながっていくのではないかと共有することができた。

○講評 文部科学省初等中等教育局教育課 教育調査官

- ・保育園・幼稚園・小学校では
教師が子どもの姿を見ながら、子どもの思いや表現の違いに気付いたり、つながりを見つけたり、受け入れたり、共感したりすること、それは感性を働かせることである。
- ・中学校・高等学校では
子どもたちは様々な経験をしながら実感的に学びとっていくため、題材との出会い、人との出会い、作品や材料との出会いなど、教師がどのように出会いを設定していくかが大切である。

○絵本作家 記念講演

- ・作者の絵本の読み聞かせを、実際に見たり、聴いたりした。講演内容から、答えがないのが図画工作の面白さ。図画工作はその人の感性である。先生が子どもの感性を伸ばしてあげることが大切であるということを知ることができた。

指導講評 大阪市教育委員会事務局 指導部 初等・中学校教育担当 指導主事

○生活の中で、身近な人ものことに関わり、感じた思いを自分らしく表現する経験を積み重ねていくことの大切さが丁寧に追求された研究だった。「幼児が夢中になる」「繰り返し遊ぶ」「友達や教師に思いを伝える」という姿を大切に、教師がどのように環境を整え、どのように幼児の思いを受け止め、表現が広がるように支えていくのか、そうした教師の関わりにもしっかりと目が向けられていた。

○令和7年9月25日 中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」より

・遊びを通して学ぶことの楽しさを知り、積極的に物事に関わろうとする気持ちをもつようになる過程が、小学校以降の学習の意欲へとつながっていくことが示されている。

第2ブロックの研究が正にその方向性と深く重なっている。研究主題「自分の思いを表現する楽しさを味わう幼児を育てる一かいたりつくったりする中で」身近な「人」「もの」「こと」に関わり、感じた思いを自分らしく表現する経験を積み重ねていくことの大切さが捉えられていた。国が示した直接的な体験の充実という方向性と重なっている。さらに、本研究はただ体験を増やすということだけではなくその体験がどのように表現につながっていくのかが丁寧に読みとられている。

○第2ブロックの今日的な価値について

・1つ目、実体験の価値を改めて確かなものとして示した。ICT機器に触れることが増えている中で、生活や遊びを通して実体験を積み重ね、自ら表現を楽しみ表現したいという思いを育んでいくことに焦点を当てたこの研究が、今の時代だからこそ非常に意味のある取組であると感じた。

・2つ目、幼児期の学びと小学校以降の学びとのつながりを具体的な姿で示していた。幼児は普段の生活の中で経験している様々なことを、遊びや表現に生かしている。この点は、小学校指導要領の各教科に深くつながっている。学習指導要領解説生活科では、「身近な人々や社会自然に直接関わる体験を通して、自分との関わりで捉える。また、幼児期との接続が大切にしている」と明記されている。算数科では、「日常の事象を数理的に捉えて問題解決していく」理科では、「自然の事物現象を生活経験と関係付けながら考えていく」図画工作科では、「感性や想像力を働かせながら生活や社会の中の形や色などと豊かに関わり、表現や想像につなげていくことを大切にしている」と示されている。幼児期の実体験に根ざした遊びや表現がそのまま小学校以降の学びへと滑らかにつながっていくことを、この研究で具体的に示している。

特に1年目で共通理解した「夢中になる」とは、幼児が大きくなって集中して物事に取り組む力につながる。「繰り返し遊ぶ」とは、試したり、工夫したりしながら粘り強く取り組む姿につながる。「友達や教師に思いを伝える」とは、自分の思いや答えを考え、相手に伝えることで他者と関わりながら学ぶ姿につながる。国の論点整理が示す遊びを通じた学びが小学校以降の基盤になるということ、この3つの視点からも子どもの具体的な姿としてこの研究で示していた。

・3つ目、教師の専門性の価値を改めて明らかにした。本研究の大きな特徴は、体験や表現そのものだけでなく教師がどのように幼児に寄り添い、声をかけ、一緒に遊びながら活動を豊かにしていくかという教師の専門性を生かした関わりにもしっかりと視点が置かれている。実践記録を見ても、教師が環境を整え幼児の思いをさりげなく受け止めたり、問いかけたりしながら、安心して表現できるよう支えている姿が多く見られた。これは、教師の専門的な読みとりや支えの中で、豊かに育まれていることを示している。

・第2ブロックの研究は、国の論点整理が示した方向性につながっているだけではなく、その方向性を既に実践していることが、幼小連携の大きな価値である。「実体験を大切にすること」「遊びを通して学ぶこと」「遊びが小学校以降へとつながっていくこと」「その育ちを教師が専門性をもって支えること」を議論だけでなく幼児の具体的な姿と保育実践によって示していた。



学んだこと・感想

・中央教育審議会教育課程企画特別部会「論点整理」と第2ブロック研究部の研究を重ねて考えることで、いかに、実体験が大切であるかということが分かった。また、幼児期に遊びや生活の中で体験したことが、どのように小学校の学習につながっていくのかということもよく理解できた。

・体験や表現そのものだけでなく、教師がどのように幼児に寄り添い、声をかけ、一緒に遊びながら活動を豊かにしていくかという教師の専門性を生かした関わりが大切であるということも学んだ。

2年間の研究を通して分析したことと重なり、その重要性を感じると共に、今後も継続していこうという意欲が高まった。